

天台系論書に引用される

『無量寿経論』について

辻本 俊郎

一、序

『無量寿経論』（以下、『論』とする）に関して業績を挙げてゐる稻城選恵は『論』には「古来より七祖聖教本系と蔵経本系とあるようである。」^①としている。

しかしながら、筆者は、これに対して『論』テキストの字句の異同、改行などを調査し、『論』テキストの系統は次のように跡づけた。^②

A系統 1 宋・東禪寺版、開元寺版、房山雷音洞石

刻本

2 宋・思溪版

3 宋・磧砂版、元・杭州版

B系統 高麗再雕版、房山雲居寺石刻本

C系統 『論註』に引用される『論』

さて、『論』は多くの諸師によって引用されており、したがって、『論』が如何に重要な書物であったことは論を俟たない。柴田泰氏は、『論』の流伝について浄土系のみならず、天台系、華嚴系、律系、法相系、密教系などのあらゆる論書に引用されたことを明らかにしている。^③

したがって、他論書に引用された『論』を深く調査することによって『論』の流伝を解く手掛かりが得られると考えられる。

そこで、本小論では天台系、すなわち、智顗偽撰『淨土十疑論』（八世紀後半）、宗曉（一一五一—一二二四）『樂邦文類』などに引用された『論』テキストは果して上記のどの系統のものであるのか、彼此照応して資料的な問題解決の一指針としたい。

二、『淨土十疑論』に引用される『論』

『淨土十疑論』に引用される『論』は以下の通りである。

・又往生論云。女人及根欠二乗種不生。⁽⁷⁾

・女人及根欠二乗種不生者。但論生彼國。⁽⁸⁾

・故往生論云。言発菩提心者。正是願作仏心。願作仏心者。則是度衆生心。度衆生心者。則是攝衆生心。又願生淨土須具二行。一者必須遠離三種障菩提門法。二者須得三種順菩提門法。何者為三種障菩提法。一者依智慧門。不求自樂遠離我心貪著自身故。二者依慈悲門。拔一切衆生苦。遠離無安衆生心故。三者依方便門。當憐愍一切衆生欲與其樂。遠離恭敬供養自身心故。若能遠三種菩提障。則得三種順菩提法。一者無染清淨心。不為自身求諸樂故。菩提是無染清淨心。若為自身樂。即染身心障菩提門。是故無染清淨心。是順菩提門。二者安清淨心。為拔衆生苦故。菩提心是安穩一切衆生清淨心。若不作心拔一切衆生。令離生死苦。即違菩提門。是故安清淨心。是順菩提門。三者樂清淨心。欲令一切衆生得大菩提涅槃故。

ここで特に『淨土十疑論』に引用された『論』が何系

統であるのかを明らかにするために表（次頁）にした。⁽⁷⁾

この表から『淨土十疑論』では『往生論』といいたがらも『論』のみでなく、『論註』の文をも引用していることが明らかとなった。つまり、『淨土十疑論』では『論』と『論註』を区別していないのである。したがって、『淨土十疑論』の作者は『論』ではなく『論註』そのものを見ていたと考えられる。

三、『樂邦文類』に引用される『論』

◇『樂邦文類』卷第一、宗曉

・無量寿論 往生偈及五門修法⁽⁸⁾

・無量寿優波提舍論 一卷 堂字函
婆藪婁豆菩薩造。元魏天竺三藏菩提留支訳⁽⁹⁾

・天親論女人根欠不生。⁽¹⁰⁾

・觀經疏問曰。論說女人根欠不生。此經章提希五百侍女同生云何。曰論說女人根欠不生者。就彼為言。生

A、B系統	C系統	『淨土十疑論』に引用された『論』	『論註』（論、本文も含む）
女人及根欠二乘種不生 一者依智慧門。不求自樂遠離我心貪著自身故。 二者依慈悲門。拔一切衆生苦。遠離無安衆生心故。 三者依方便門。 憐愍一切衆生心。 遠離恭敬供養自身心故。 （中略） 一者無染清淨心。以不為自身求諸樂故。（A系統） 不以為自身求諸樂故。（B系統） 二者安清淨心。以拔衆生苦故。 三者樂清淨心。以令一切衆生得大菩提故。	女人及根欠二乘種不生 一者依智慧門。不求自樂遠離我心貪著自身故。 二者依慈悲門。拔一切衆生苦。遠離無安衆生心故。 三者依方便門。 憐愍一切衆生心。 遠離恭敬供養自身心故。 （中略） 一者無染清淨心。以不為自身求諸樂故。 二者安清淨心。以拔衆生苦故。 三者樂清淨心。以令一切衆生得大菩提故。	女人及根欠二乘種不生 一者依智慧門。不求自樂遠離我心貪著自身故。 二者依慈悲門。拔一切衆生苦。遠離無安衆生心故。 三者依方便門。 當憐愍一切衆生欲其樂。遠離恭敬供養自身心故。 （中略） 一者無染清淨心。不為自身求諸樂故。 菩提是無染清淨心。 若為自身樂。 即染身心障菩提門。 是故無染清淨心。 是順菩提門。 二者安清淨心。為拔衆生苦故。 菩提心是安穩一切衆生清淨處。 若不作心拔一切衆生。 令離生死苦。即違菩提門。是故安清淨心。 是順菩提門。 三者樂清淨心。欲令一切衆生得大菩提涅槃樂故。	女人及根欠二乘種不生 一者依智慧門。不求自樂遠離我心貪著自身故。 （中略） 二者依慈悲門。拔一切衆生苦。遠離無安衆生心故。 （中略） 三者依方便門。 憐愍一切衆生心。 遠離恭敬供養自身心故。 （中略） 一者無染清淨心。以不為自身求諸樂故。 菩提是無染清淨心。 若為身樂。 即違菩提是故無染清淨心。 是順菩提門。 二者安清淨心。以拔衆生苦故。 菩提是安穩一切衆生清淨處。 若不作心拔一切衆生。 離生死苦。即便違菩提是故拔一切衆生苦 是順菩提門。 三者樂清淨心。以令一切衆生得大菩提故。

彼国者。淨根離欲故無女人。⁽¹⁾

・無量寿論 往生偈及五門修法天親菩薩

世尊我一心 歸命尽十方

無量光如來 願生安樂国

觀彼世界相 勝過三界道

究竟如虚空 廣大無辺際

正覺阿弥陀 法王善住持

如來淨華衆 正覺華化生

愛樂佛法味 禪三昧為食

永離身心惱 受樂常無間

大乘善根界 等無譏嫌名

女人及根欠 二乘種不生

衆生所願樂 一切能滿足

故我願往生 阿弥陀仏国

我作論說偈 願見弥陀仏

普共諸衆生 往生安樂国

若人修行五念門成就者。畢竟得生安樂国土見阿弥陀仏。

一者礼拜門。身業礼拜阿弥陀仏。為生彼国意故。二者

讃嘆門。口業讃嘆彼仏光明智相。欲如実修行相應故。

三者作願門。心常作願。一心專念畢竟往生。欲如実修

行奢摩他故。四者觀察門。以智慧觀察。欲如実修行毘婆舍那故。一觀察彼国土莊嚴。二觀察彼仏莊嚴。三觀察彼諸菩薩莊嚴。五迴向門。所有功德善根。以方便迴向撰取衆生。不捨一切世間故。又觀察門三種莊嚴。略說一法句。謂清淨句。真実智慧無為法身故。菩薩如是修五門。自利利他。速得成就菩提故。⁽²⁾

◇『樂邦文類』卷第二

・天親教宗也。無量論有求生之偈。⁽¹³⁾

この中で、『樂邦文類』に引用される『論』がどの系統に属するかを明らかにするパロメーター役を果たすのが次に挙げる箇所である。

① 「無量寿論」「無量寿優波提舍論」

題目についてであるが、拙稿(二〇〇〇)で扱ったので重複するので、詳細は省くが、「無量寿論」というのは、『論』に註を施した曇鸞が『略論安樂浄土義』の中で、

若依無量寿論。以二種清浄撰二十九種莊嚴成就。⁽¹⁴⁾

と記しているのに一致する。また、「無量寿優波提舍論」というのは、経録からすれば、費長房撰『歷代三寶紀』

(五九七)、道宣撰『大唐内典録』(六六四)⁽⁶⁾のある「無量寿優波提舍經論」に接近している。さらには、テキストの系譜からすれば、A系統1「無量寿優波提舍經」が最も近いように思われる。⁽⁷⁾

② 「堂字函」

ここでいう「堂」というのは千字文による函架の番号である。このことは宗曉が実際に見た『論』が大蔵經の中の『論』であることを物語っている。そして、『論』に「堂」という函架の番号が付されているのは、A系統、すなわち宋版系統である。これに対して、B系統・高麗再雕版では「虚」、房山雲居寺石刻本では「習」という函架の番号が付されているのである。

③ 「故我願往生」

A系統 「故我願往生 阿弥陀仏国」
B系統 「故我願往生 阿弥陀仏国」
C系統 「是故願生彼 阿弥陀仏国」
となっており、C系統、すなわち、『論註』に引用される『論』ではないことは明白である。

④ 「一者礼拝門」

A系統 「一者礼拝」
B系統 「一者礼拝門」
C系統 「一者礼拝門」
となっている。ここでは、B系統・C系統を支持している。

⑤ 「身業礼拝阿弥陀仏」

A系統 「身業礼拝阿弥陀仏如来応正遍知」
B系統 「身業礼拝阿弥陀如来応正遍知」
C系統 「身業礼拝阿弥陀如来応正遍知」
となっている。宗曉はこの文を略して引用しているが、ここでは「阿弥陀仏」とあることからA系統を支持している。

⑥ 「二者讃嘆門」

A系統 「二者讃歎」
B系統 「二者讃歎門」
C系統 「二者讃嘆門」
となっている。ここでは、C系統を支持している。

⑦ 「所有功德善根以方便迴向攝取衆生不捨一切世間故」

A系統 「同願生彼安樂国土願心所有功德善根以巧

方便迴向攝取衆生不捨一切世間故」

B系統 「心常作願迴向為首成就大悲心故」

C系統 「心常作願迴向為首得成就大悲心故」

となっている。この箇所はA系統とB・C系統で甚だ字句の異同が激しいので、それぞれ訳を付すと、A系統では、「同じくかの安樂国土に生まれるように願い、心のあらゆる功德善根を願い、巧方便迴向をもって作願し、迴向する」となり、B・C系統では、「心に常に願をなし、迴向することを第一となす」となる。ここでは明らかにA系統を支持している。

⑧ 「菩薩如是修五門自利利他速得成就菩提故」

A系統 「菩薩如是修五門行自利利他速得成就阿耨

多羅三藐三菩提故」

B系統 「菩薩如是修五門行自利利他速得成就阿耨

多羅三藐三菩提故」

C系統 「菩薩如是修五念門行自利利他速得成就阿

耨多羅三藐三菩提故」

とある。「五門」と「五念門」との違いであるが、前者は五念門を修し、その行が成就することによって得ることのできる五つの功德を指すのであって、後者は安樂国土に生まれるための実践である。

しかし、この文では、A系統、あるいはB系統を支持している。

以上のことをまとめると、

① A系統、

② A系統、

③ A系統、あるいはB系統、

④ B系統・C系統、

⑤ A系統、

⑥ C系統、

⑦ A系統、

⑧ A系統、あるいはB系統

をそれぞれ支持している。多少の混乱はあるものの、『樂邦文類』に引用される『論』はA系統であると断定してよいと考えられる。

四、その他

◇『仏説観無量寿仏經疏』智顗偽撰（七世紀後半）

・問論女人根欠不生。（中略）論說女人根欠不生者。⁽¹⁸⁾

◇『観無量寿仏經疏妙宗鈔』卷第六、知礼（九六〇—一〇二八）

・無量寿經論。今云往生論是也。天親所造有十七成就。至第十六大義門成就中。偈云。大乘善根男。等無譏嫌名。女人及根欠。二乘種不生。長行釈云。故淨土果報離二種譏嫌過。一者体。二者名。体有三種。一。二乘人。二女人。三諸根不具足人。無此三種過故名離譏嫌也。名亦三種非但無三体。乃至不聞二乘女人諸根不具三種名故。（中略）⁽¹⁹⁾彼論二乘種不生。（中略）論偈女人根欠不生之文。

・往生論。論云不生。⁽²⁰⁾

『仏説観無量寿仏經疏』、『観無量寿仏經疏妙宗鈔』に引用される『論』はどの系統の『論』を見たのかを示す

手掛かりとなる文を引用していないので、判断することはない。したがって、ここでは引用文のみ挙げておくにとどめる。

五、まとめ

以上の考察をまとめると、次のようになるであろう。

・『浄土十疑論』では『往生論』といいながらも『論註』の文をも引用していることから見て、『浄土十疑論』の作者は『論註』そのものを見ていたと考えられる。

・『楽邦文類』に引用される『論』はA系統であると考えられる。

・『仏説観無量寿仏經疏』、『観無量寿仏經疏妙宗鈔』に引用される『論』はどの系統のものを見たのか、判断できない。

註

(1) 稻城選恵（一九七〇）。

(2) 拙稿（一九九九）。

(3) 柴田泰（一九九六）。

- (4) 『大正』四七卷八十頁中。
- (5) 『大正』四七卷八十頁中。
- (6) 『大正』四七卷八一頁上。
- (7) 「浄土教の総合的研究」研究班編（一九九九）、真宗教学研究所編（一九七二）も併せて参照されたい。
- (8) 『大正』四七卷一五〇頁下。
- (9) 『大正』四七卷一五一頁上—中。
- (10) 『大正』四七卷一五三頁中。
- (11) 『大正』四七卷一五五頁上。
- (12) 『大正』四七卷一六三頁中—下。
- (13) 『大正』四七卷一七二頁上。
- (14) 『浄土宗全書』一卷 六六六頁上。
- (15) 『大正』四九卷八六頁上。
- (16) 『大正』五五卷二六九頁上。
- (17) 「浄土教の総合的研究」研究班編（一九九九）五六—五七頁。
- (18) 『大正』三七卷一九三中。
- (19) 『大正』三七卷二二八中。
- (20) 『大正』三七卷二三一下。

参考文献

- 安達俊英（一九九九）：『浄土三部経』と『往生論』『佛教大學総合研究所紀要別冊浄土教の総合的研究』
- 稻城選恵（一九七六）：『浄土論序説』百華苑
- 岸 一英（一九九九）：『無量寿経論』校異の意義『無量寿

経論校異』佛教大學総合研究所「浄土教の総合的研究」研究班編

柴田 泰（一九九六）：『中国仏教における『浄土論』『浄土

論註』の流伝と題名（一）『印度哲学仏教学』第十一号

柴田 泰（一九九七）：『中国仏教における『浄土論』『浄土

論註』の流伝と題名（二）『印度哲学仏教学』第十二号

「浄土教の総合的研究」研究班編（一九九九）：『無量寿経論校異』佛教大學総合研究所

真宗教学寮編（一九二五）：『浄土論註校異』真宗教学寮

真宗教学研究所編（一九七二）：『浄土論註総索引』東本願寺出版部

大藏会編（一九六四）：『大藏経 成立と変遷』百華苑

高瀬承厳（一九一七）：『類本往生論に就きて』『仏書研究』第二十九号

辻本俊郎（一九九九）：『無量寿経論』テキスト考『無量寿経論校異』佛教大學総合研究所「浄土教の総合的研究」研究班編

辻本俊郎（二〇〇〇）：『無量寿経論』テキストの検討『佛教大學仏教学会第八号

辻本俊郎（二〇〇一）：『無量寿経論』願生偈の文献学的研究『佛教大學仏教学会第九号

幡谷 明（一九八九）：『曇鸞教学の研究—親鸞教学の思想的基盤—』『資料篇』

※追手門学院大学卒業後、筆者を佛教大學大学院へと進学させてくれた亡父辻本政一（二〇〇一年十一月十四日遷化。七七歳）にこの小論を捧げる。